



TITLE:

感謝と回想 (吉田城先生追悼特別号  
)-- (思い出)

AUTHOR(S):

鈴木, 道彦

---

CITATION:

鈴木, 道彦. 感謝と回想 (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究  
2006, S: 352-355

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138045>

RIGHT:

## 感謝と回想

鈴木道彦 Michihiko SUZUKI

それほど頻繁にお会いする間柄ではなかったが、吉田城さんのことを思い返すと、浮かんでくるのは深い感謝の気持と、ぽっかりと大穴があいたような喪失感である。

最初の出会いがいつどこでだったのか、私にはもう記憶がない。しかし鮮明に憶えているのは、フランス語フランス文学会の大会で吉田さんが初めて研究発表をされたときのことである。1979年に学習院大学で行われた春の学会だった。

その少し前に私は吉田さんから、フランスで提出された学位論文を1部送られていた。多くの人の引用する *Proust contre Ruskin: La Genèse de deux Voyages dans la Recherche d'après des Brouillons inédits* というタイトルの分厚い論文と、同じくらいに厚い草稿の転写資料だが、それを読んで私は驚嘆したものである。あの読みにくいプルーストの自筆原稿を、これほどまで精密に解説したことに脱帽したが、それだけではなく、錯綜した草稿をその解説に基づいてときほぐしてゆく細かな論理の運びにも感心した。私が一読してその論文の細部に至るまで充分に理解したかどうかは覚束ないが、とにかくそこには並々でない力量が感じられたのだった。

79年の仏文学会における吉田さんの発表は、この論文のごく一部をまとめられたもので、ベルゴットの形成される過程でラスキンがどのように影を落とし、どのように消えていったのかを、3つの段階にわたって明快に述べたものだった。それを聴きながら、私は当時まだ若い研究者だった吉田さんが、すでに豊かな学殖と確実な研究の方法を身につけておられることを感じた。

日本のプルースト研究は、この70年代後半から目覚ましい飛躍と広がりを見せたと思う。その2年前、すなわち1977年に明治学院大学で開催された学会で、私はたまたま20世紀部門の1室の司会を依頼されたが、その部屋で行われた4つの発表はすべてプルーストにかんするもので、こんな現象は前代未聞のことだった。草稿研究では、1977年の初めにパリ大学の口頭審査を通過した吉川一義さんの見事な学位論文があり、それが日本だけではなく、広くプルースト研究に刺激を与えたことはよく知られている通りである。1979年の学会のときも、同じ部屋の3つの研究発表がみなプルーストを対象としていたが、とりわけ吉田さんの発表は、ここにまた一つ新星があらわれた、といったような、強烈な

印象を与えるものだった。

振り返ってみると、このとき以来、私は20歳も年下の吉田さんから、ただ教わることばかりが多かった。たとえばその翌年の1980年2月末には、たまたま京都に行く用事もあったので、日取りを打ち合わせて吉田さんをお宅に訪ねたこともある。私はその年の4月から、10数年ぶりに1年間の在外研究の機会が与えられたので、フランスでのブルースト研究の現状や草稿の状態、今後の『失われた時を求めて』の刊行の可能性など、いくつかのことについて、最新の情報を持っていると思われる吉田さんに連絡し、是非お会いして質問に答えてほしいと頼み込んだのだった。当時は豊中市に住んでおられたかと思うが、その日はたしか雪のために新幹線が大幅に遅れ、吉田さんをすっかり待たせてしまったのを憶えている。

今でも私は、若い方の論文によって目を開かれることが多いし、特定の問題について深く研究している方には個人的に教えを請うことも少なくない。けれども、このような形でお宅まで出かけて行ってあれこれと質問したのは、おそらく後にも先にもこのときだけだった。またその後も、たぶん1982年か3年頃だったと思うが、東京で開かれた春の仏文学会のために吉田さんが上京された機会に、新宿のプチ・モンドという喫茶店に来ていただき、いろいろと意見を求めたこともあった。吉田さんはそのたびに快く応じて下さったが、自分の方が先輩であるのをよいことに、こんなふうに勝手なお願いをしながら、私は彼の明るい爽やかな人柄と、開かれた柔軟な精神にも、強く惹かれるものを覚えていた。

なお、これはずっと後になってのことだが、2001年3月に私の『失われた時を求めて』の全訳が終わり、友人たちが東京の高輪プリンスホテルで完結記念のパーティを開いてくれた折りには、吉田さんはわざわざ京都から出て来られて、ひと言挨拶までして下さった。私が遠方から参加して下さったことに御礼を申し上げると、「今日は大事な会ですから」という趣旨のことを言われたのは、たいへん嬉しいことだった。

吉田さんが比較的短い生涯のあいだに残された膨大な仕事は、今後も多くの人に読まれ、研究者に引用されることだろう。そのなかで、フランス語で書かれた多数の論文については、然るべき方が語られるだろうからふれないが、一般の読者にとって真っ先に頭に浮かぶのは、プレイヤード版第1巻の校訂や、素人にも分かるようにかみ砕いて書かれた大作『「失われた時を求めて」草稿研究』（平凡社、1993年）などではないだろうか。けれども、そうしたものの陰に隠れて次の2つのものがあることを、私は吉田さんならではの特徴的な仕

事ぶりだと思う。その一つはブルースト＝ラスキン『胡麻と百合』の翻訳（筑摩書房、1990年）、もう一つは『神経症者のいる文学』（名古屋大学出版会、1996年）である。

誰でも知っているように、前者は実に不思議な書物で、ブルーストの翻訳したラスキンを、序文や訳注を含めてそっくりそのまま日本語に訳し直し、かつそれに新たな訳注や解説をつけているわけだが、英語、フランス語、日本語という3層になった言語表現が感じられると同時に、互いにからみあいながらも鎬を削っているラスキン、ブルースト、吉田城という3人のエキリチュールが、豊かな効果を挙げている作品だと思われる。そこにはまたブルーストのラスキンに対する、そして吉田さんのブルーストに対する、それぞれ強い愛着と冷静な批判も読みとることができる。このブルースト訳『胡麻と百合』のことは、『「失われた時を求めて」草稿研究』のなかでも扱われているが、それより前に刊行されたこの日本語訳につけられた注や解説を見ると、最初の学位論文がここに繋がり、それがさらに後の『草稿研究』へと伸びていくことがよく分かって、吉田さんの一貫した関心が示されていて興味深い。言い換えれば、『草稿研究』での言及は、予めこの翻訳を通して実質的な検証を受けていたのだろう。

草稿に遡ってそれを細かく解読するという方法は、とにかく一人の作家の細かな実証的研究に限定され、狭い専門家の作業に陥り易い。しかし吉田さんの見事なところは、同時にそれとまるで逆の広い視野を兼ね備えておられたことだろう。それが『神経症者のいる文学』にあらわれている。『草稿研究』の最後に「都市・書物・神経症」という1章があるのを見れば、これも出発点はブルーストだったのだろうが、その問題を吉田さんは19世紀全体に広げて、バルザック、フローベール、ゾラ、ユイスマンス、モーパッサンから、何人かの画家やブルーストまでを、具体的な作品に沿って、しかも周到に当時の医学の水準まで考慮に入れながら分析しておられる。いくらかあっさり書かれているのを惜しむこともできようが、私はサルトルの『家の馬鹿息子』の原書第3巻を思い浮かべながら、興味深く読ませていただいた。一方でブルーストにかんするごく微細なところまで知りつくした研究があり、他方ではこの広い視野に立った著書がある。このことは、吉田さんがきわめてバランスのとれた数少ない本格的な学者だったことを証明していると思う。

教わることはばかり多かったと上に書いたが、実は去年の5月半ばにも、私はまた一つ、吉田さんに教えを請いたいことがあるのに気がついた。プレイヤード版第1巻にごく些細な疑問点を発見したので、その巻の校訂にかかわった吉

田さんなら、事情をご存じかもしれないと思ったのである。そこで何気なくお電話をすると、ひと月ほど前から入院中です、という夫人の答えであった。いろいろと感染があったが、いまは大分快方に向かっている、簡単なことなら伝えます、と親切に言って下さったので、では自分で手紙を書きましょう、と私は答え、見舞いと質問をかねた短い書簡を認めた。べつに急ぐことでもなかったし、そのうちによくなれたらあらためてご連絡しようと思っていたところへ、とつぜん訃報が飛び込んできたのだった。

日頃から病身にもかかわらず、実に精力的に活動し、仕事をこなされる吉田さんのことだから、今回もじきに退院されるだろうと、つい私は高をくくっていたのである。このようなことになるとは夢にも思わずに、最後に何とも間の抜けた質問をしたものだと思われてならない。

最初にも述べたように、生前の吉田さんとは、関西と東京という距離もあり、普段は学会やブルースト研究会でお会いするだけで、それ以上に親密におつきあいする関係ではなかった。しかし、たとえ頻繁にお会いはしなくても、全面的に信頼することのできる大きな存在として、私は常に吉田さんのことを意識していた。また自分の人生を顧みると、このようなかたと出会えたのは私にとって幸福だったと、あらためて思わずにはいられない。それにしても馬齢を重ねている自分に比べて、平凡な言い方だが、吉田さんの死はあまりにも早すぎた。身近な方たちにとってはもとよりだろうが、世界のブルースト研究にとっても、日本の仏文学にとっても、これは埋めることのできない大きな損失である。ただ吉田さんは、ご自分の著作を発表されるだけではなくて、研究者を育てるのにも実に熱心な方だったから、彼が蒔かれた種からは、やがて別な大樹が育つことだろう。そう考えるのが、いまは私にとってはたった一つの慰めである。

(すずき・みちひこ 獨協大学名誉教授)